

作ることを最大の策戦となせしこと前記の如し。組合員は之を解せざりき。局を結ぶに當りて、最高幹部も應援者も組合員に對し、諸君の御努力に依りて、と云へり。組合員は事實上罷工の破れしを心付かず、汝は勝てりとの讃辭に氣は驕れり。

第二、二十二日第一次罷業終熄の對談後再び代表者は工場を訪ね、佐々山工場長に對し明日、二十三日（午後四時一同構内に集つて總代より男女工一同に挨拶して別れ、其翌朝（二十四日）より就業したし」と申入れたり。此申出は素より他意ありしに非ず、我國労働者の傳統的慣習即ち手を拍つて別れると云ふ如き心理に過ぎるべし。佐々山工場長は之を諾し電話を以て持田常務に報告したるに常務は労働者が萬一群集心理に驅られ不穩の事なかるべきを保し難きに想到し、之を取止むべきを命じたり。工場長は二十二日午後七時頃、大平直美を工場に招き常務の意志を傳へたるに、大平は一同に之を傳ふべしとして引取れり。而も此交渉一件は罷業者團體の氣に止められず。二十三日午後四時職工一同隊伍を組み工場に到れるに門は堅く鎖されて之を容れず、職工團は沸騰せり。即ち總代を以て恰も工場にありし持田常務に面會し是非共に話をしたしと懇談せるも常務は自説を持って之を肯へんせず、昨日大平に對し斷り置きしに今更かゝる形式的のことを強行する要なからずやと職工側の要求を峻拒し、遂に物別れとなり、剩へ門前に於て警官のために解散を命せられ激昂して本部に引取りしなり。

第三、職工團は非常の不滿を抱いて、罷業本部に引取れり、然るに時も時なりき、其日會社にて女工中の強硬分子たる

今野テツ、根本ツタ、山本ヤヨ、遠藤キヨ、菊地ミヨシ、市川トメ、川村トメ、阿部ヤスミ、重川ソデ、村越ヨネ

右十一名が誠首されて罷業本部に來合せたり。（會社は此解雇に對し契約満期のためなりと辯解せり）工女の誠首を目のあたりに見て同情の念押へ難きものあり、而も會社の決意に怖へたり。彼等は思へり、會社は講和の日に於て尙傍若無人に誠首を斷行すとせば廿四日の出勤日當日に於て一網打盡に誠首を爲さんこと観察するに難からず。會社に欺かるゝ勿れ、會社は餌を與へて職工の安心を買ひ隙に乗せんとするなりと。同夜八時棚橋理事は來れり、總會は再び龜戸長樂館に催されぬ。

十七 罷業者の新要求

總會は異常の昂奮裡に催され、満場一致再罷工は決せられぬ。棚橋氏は最高幹部の苦心が水泡に歸し行くを思ひつゝ、「今は又何をか爲すべき」と黙して唯之を傍觀したり。棚橋氏の性格は之を一喝し冷たき理智の鞭を振るべく彼は餘りに熱血兒なりき。而して人を強ひるを得ざるの情あり。此時罷工團をして冷靜に團體の實力につき反省せしむるを得しめたらんには後日の慘敗は來らざりしならん。同